

金子三次郎

1. エネルギー資源について

旧鈴木商店幹部の電力石炭石油等のエネルギー資源に対する考え方採り上げ方について振り返つて見ることにする。

鈴木商店がそれらの事業に対し具体的に進出して形に現われて来たのは別紙の通りオ一次大戦の大正四年以後からの様で、他の財閥三井、三菱等と比較すると数十年は立ち遅れておる。明敏な鈴木^の幹部に於ては勿論これらの資源開発の重要な事業であることは充分承知されていたと思うが、何分これらの事業経営には巨大な資本と優秀な技術者を必要とする上に相当の危険性も含んで居るので、たやすく着手出来なかつたものと想像する。

大体鈴木商店は日清戦争以前迄は砂糖樟腦を主軸とする資本金拾^萬數円内外の商舖に過ぎなかつたのであるが、日清日露及びオ一次歐州大戦の三大戦役を契機として三段飛びの大飛躍を行つたのである。此大発展に成功せしめたものは金子直吉氏、柳田富士松氏、西川文蔵氏、高畑誠一氏其他先輩諸氏の超人的努力と前途に対する明察とによるものである。

- (1) 日清戦役の結果我国が大勝利を収め台湾が新領土となると鈴木は此台湾に於ける樟腦の製造販売権をにぎり利益を収めると共に樟腦事業の王者となり且つ台湾に於て後日発展の基礎をきづいた。
- (2) 日露戦争では戦時中及び戦後の好況に乗じ各種の取引に好成績を収めたが何よりも大きな儲けは此戦争の数年前に大阪の^辰藤田助七氏と協力して福岡県門司市大里に資本金六拾万円で設立した大里製糖所を競争相手である大日本製糖会社の要請で驚くなかれ金六百万円で売却したことである。

此大里製糖のことは当時財界の最大の話題になつた程鈴木の儲けはすばらしいものだつた。これが明治四十一年頃だつたと思う。此儲けで鈴木は資金運用力は非常に増大し、其の余力を以て台湾には東洋北港などの製糖会社、九州には大里製粉会社、札幌に札幌製粉などを起し其他各方面に著々と発展した。

- イ) 大正四年から全九年に至る才一次欧州大戦前後の鈴木商店の大発展はもはや説明する必要はあるまい。当時金子様がロンドン支店の高畑様に書き送つた手紙の文句に此好機に乗じ大活躍をなし天下の富を三井、三菱と三分せんと云われた事は有名である。(此手紙の写真は松方金子伝の巻頭にある)此様に鈴木商店も三大戦役の利益蓄積によつて資金運用に余裕が出来てきた上に金融力も強大になつたので、この前後からエネルギー資源である水力電気石炭石油などは勿論其他のあらゆる方面に進出することになつた。
- イ) 石油に関してはライジングサン系の旭石油会社を設立し、岡和氏、長崎英造氏、飛工重利氏、幸松文太氏等を当らせた。此旭石油が今日の昭和石油の**前功**である。
- ロ) 石炭に関しては別紙を参照されたい。ちなみに羽幌炭鉱の開発は昭和五年頃から着手したが、其の鉱区の買収は古く大正七年前後である。当時北海道に於ては薄荷を大量に買付けており、又製粉業等を行つておつたが、将来重化学工業に進出する用意として此鉱区を買収しておいたものである。鉱区の調査には初め富樫絹介氏が当つた。のちにボーリング及び具体的開発には昭和初年から古賀六郎氏が当つた。これが後年羽幌炭鉱鉄道の設立となる。

い) 水力電気に関しては中津川発電太田川発電などの水利権を得てをるが、
充分なことは別方面で調査せられたい。

以 上